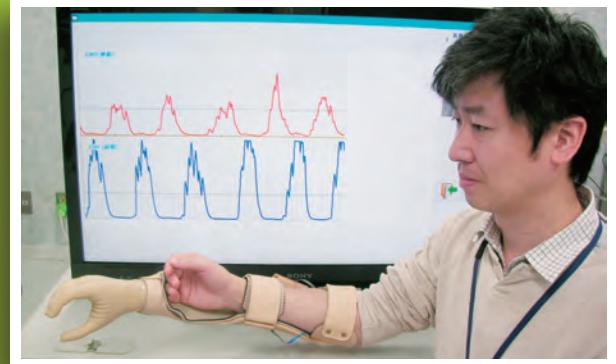


アシステック通信

ASSISTECH

2013
69号

アシステック2013 ～研究成果の中から～



筋電モニターシステム(詳細は4ページ)
幼児の方でも筋電義手の操作訓練をスムーズに行えるよう、
義手の動きを反映した筋電波形をモニタに映し出すシステム。



頭頸部姿勢の調整計測装置(国際特許出願中、詳細は2ページ)
摂食嚥下障害者・高齢者の飲み込みやすい頭頸部姿勢を調節
及び計測しオーダーメイドで嚥下枕を提供

目次

- P.1 平成25年度 福祉のまちづくり研究所の組織体制
- P.2 平成24年度 研究成果報告
- P.5 平成25年度 私たちの主な研究テーマ
- P.7 家庭介護・リハビリ研修センター課からのご案内
- P.11 アシステック掲示板
 - ・平成25年度ひょうごユニバーサル社会づくり推進大会・第20回福祉のまちづくりセミナーのご案内
 - ・第3回 見ることに不自由さを抱えている方のためのユニバーサル機器&誰にでも役立つ防災グッズ展
 - ・福祉のまちづくり研究所 創設20周年シンポジウム



情報革命の光と陰

所長 末田 統
すゑだ おさむ

WHOの世界保健統計によると2011年のわが国の平均寿命は、女性86歳、男性79歳で男女平均は83歳になり、サンマリノ、スイスと同じく世界一の長寿国である。

一方、アフリカ大陸の国々を含め、平均寿命が60歳に満たない国は、WHO加盟193カ国中33カ国もある。

近い将来、わが国は人生90年の時代を迎えようとしている。

食生活環境、住環境、医療環境の進歩には目を見張るものがあり、人工的な生活環境は明らかに変わっている。

iPS細胞による臓器の再生や、遺伝子情報の解読による個人の特定と個性の解明は、障害児出生確率や癌発症確率の算出にまで発展してきた。ある国では、(国家政策として)重度的心臓病小児の誕生が認められない現実があると言う。

第2次産業革命といわれる半導体技術とデジタル情報に支えられた科学技術は、豊かに見える生活の環境と、弱者を切り捨てるグローバル経済社会を創造し、地球を小さなお手玉のようにさえ思させる。

新しいことへのチャレンジを否定するものではないが、生きることに魅力を感じ、嘗々と引き継いできた伝統文化を守り伝えることも、自然淘汰の中で引き継がれてきた遺伝子情報を守ることと同様、大切な課題である。

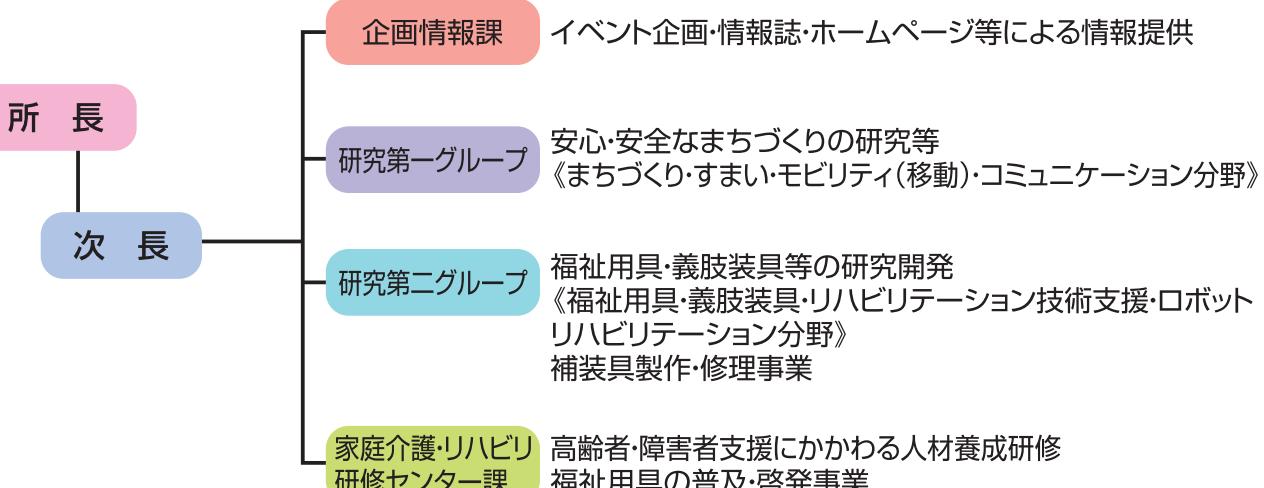
どの様な美男と美女が恋に落ちるのかまでは、現在の科学技術をもってしても見通せないことが、せめてもの救いであるような気がする。

灼熱の太陽の存在は別にして、台風や竜巻、寒波や熱波、巨大地震など、地球にとって、ほんのわずかな変化(我々にとっては偉大な自然の力)に成すすべも無い自然の中の小さな存在の我々人間は、生きることに真摯に向き合い、心の触れ合いに感謝し、多様な人々と共に生きることに腐心したいものである。

本特集号は、昨年度終了した事業と本年度の計画を掲載しています。

これからも皆様に支えられ、ご期待に応えられる研究所でありたいと思っています。

平成25年度福祉のまちづくり研究所の組織体制



せつしょくえん げ

摂食嚥下リハビリテーション支援機器に関する研究開発

水分や食物を口に入れ、飲み込む動作の障害を摂食嚥下障害といい、誤嚥性肺炎や窒息の原因となったり、食べる楽しみを奪いQOLを低下させたりします。医療機関ではVF（嚥下造影）という重要な検査の結果を基に食形態・摂食方法・体位が決定されます。しかし、ベッド上の姿勢調節は介助者の知識・経験・技術に依拠することも多く、姿勢調節の一貫性が求められています。そこで、VF検査時の頸部角度を定量的に測定し、病棟等のベッドで再現するシステムの開発を行いました。試作したシステムが、摂食嚥下リハを実施している臨床家から一定の評価を受けたため、計測ユニットを「イージースワロー計測器」、また、患者様個人に合わせた頭頸部姿勢保持ユニット(嚥下枕)を「イージースワロー」と名付けることとしました(図)。本研究では、ベッド上で安定した食事姿勢を可能にする新たなクッションも合わせて開発しており、平成25年度よりこれらの臨床評価を実施、その後できるだけ早い段階で市販化((株)甲南医療器研究所)にこぎ着けたいと考えています。

なお、本研究に協力下さっている医師・セラピストの皆様、また、元研究員の服部託夢氏(現・広島工業大学)に謝意を表します。



研究第二グループ
非常勤研究員 前田 恒
※4月より派遣元企業に帰任

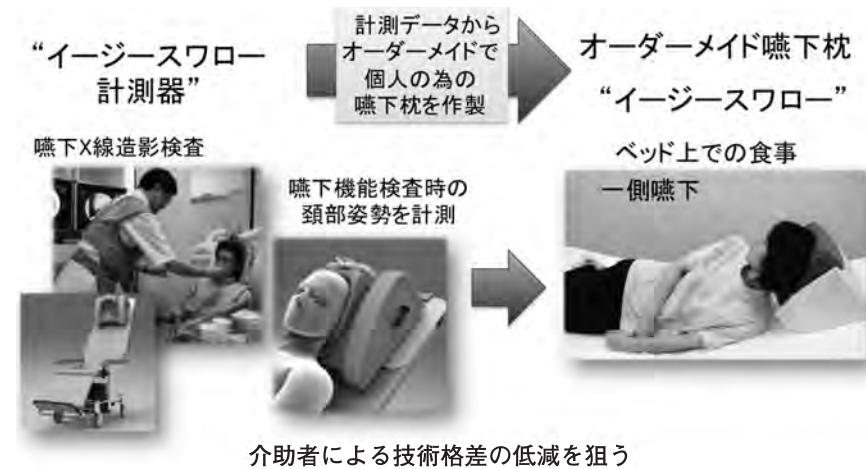


図 VF(嚥下造影)検査時の姿勢を定量的に計測・再現する機器の概要

ユニバーサル社会の実現に向けた環境整備に関する研究 －小規模購買施設における利用者を理解したバリアフリー整備手法の提案－

研究第一グループ 非常勤研究員 趙 攝姫

本研究では、小規模購買施設を対象に、利用者ニーズが反映された施設整備方法を検討した上で、「福祉のまちづくり条例」の数的基準づくりへの提案を行いました。その結果、1) 整備基準の遵守状況は低く、特に出入口とトイレのアクセス問題、建物形状・インテリアの問題が多数ありました。2) 施策推進への反映・活用に望まれる項目は、物理的な建築要素と管理運営的要素があり、3) 小規模購買施設等バリアフリー環境整備手段の確立のためには、マインドのある人材の教育、他の都道府県や関連団体との情報共有、一定の財政支援など施設設計・施工から運営管理までの対策が必要であることが再確認できました。



バリアフリー点検の様子

研究第一グループ

高齢者や障害者に配慮した公共交通機関に関する調査研究

— 車いす利用者のバス乗降とバス停機能のあり方に関する研究 —

主任研究員兼研究第一グループ長 北川 博巳

車いす利用者のバス乗降を中心に、バス停機能のあり方の提案を行うことを目的としました。今回は手動車いすと乗降スロープの間にできる負担を実験し、スロープ角が10°になると、一人で上りきれない可能性が高いことが分かりました。そこで、一つの路線に着目してバス停を調査しました。多くのバス停はノンステップバス運行時のスロープ角度が基準以下になるのですが、ワンステップバスの場合は8割以上のバス停が10°以上になるという推定結果が出て、これらの観点を入れ、バス停留所の評価を試行しました。



高齢者の居住安定化にむけたコミュニティデザインに関する研究

専門員 難波 健

高齢者の居住の安定化にとって、福祉施設を通じた事業は有効ですが、地区全体を考えると住民が皆で高齢化の課題に向かって互いに支え合う環境づくりが重要です。

そこで、相生市上町地区の方々とワークショップによるコミュニティデザイン手法を活用して地区課題等の検討を行いこの手法の有効性を検討し、こういった取り組みは継続して行われる必要があると考えられ、また、既存の制度がセイフティネットとして機能していることが必要であることについても多くの示唆が得られました。



上町地区(相生市)でのワークショップ

高齢者・障害者の地域居住支援に向けた地域公共交通に関する調査研究・高齢者・障害者のモビリティデータからみた評価の提案

非常勤研究員 天野 圭子

本研究では在宅生活にある高齢者・障害者を対象に、日常の中で必要最低限の生活行動である食料品購入、医療受診における生活行動の①現状把握、②ニーズの2点について移動の観点から着目しました。調査結果より、特徴的な点として、①現状では食料品購入において、外出時歩行能力の違いにより、食料品店までの外出割合に変化がみられました。また、②ニーズとして医療受診では、医療サービスを自ら選びたいという意識から「施設の選択自由度」との関係性が強くあらわれました。



福祉のまちづくりの面的な展開に関する研究

— 高齢者の移動手段からみた人口低密度地域(丹波市)における都市構造に関する研究 —

専門員 難波 健

人口低密度地域では人口減少と高齢化が進んでおり、こういった地域で高齢者のQOLを維持するためには、生活に必要な移動手段への適切な対応が必要とされています。

この研究では、丹波市を例に高齢者が自家用自動車に依存している実態を明らかにし、デマンドタクシーの利用実態の把握や道の駅での来訪者調査を行い、高齢者のQOLを維持するためにはデマンドタクシーの利用を促進して公共交通による移動を円滑にするか、地域拠点の近傍で居住が可能な都市構造に変えていくことが重要であるという提案を行いました。



丹波市のデマンドタクシー

変形性関節症者を対象とした異常歩行の定量的評価手法の研究

研究員 原 良昭

変形性関節症とは関節軟骨に生じた変性や断裂などが原因で関節を動かすことが困難になったり動かすときに痛みが生じたりする病気です。治療方法の一つには、関節を人工関節に置換する方法があります。本研究では人工関節への置換によって歩き方がどのように変化するかを明らかにしました。また、人工関節への置換では入院しますが、入院日数は患者様毎に異なります。日数が異なる原因を調べ、入院時の年齢や身体機能から変形性股関節症における入院日数を予測するフローチャートを作成しました。

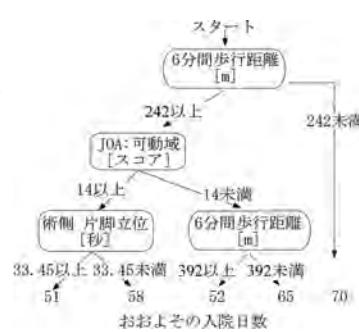


図 入院日数予測のためのフローチャート(変形性股関節症版)

筋電義手練習支援システムに関する研究 — ポータブル型練習補助デバイスの開発 —

義肢装具士 根本 和彦

筋電義手を使用するには、自在に筋電位出力を調節することが必須です。筋電義手を装着する前段階の訓練では、筋電位を表示する機器を見ながら出力練習を行いますが、実際に義手を装着しての訓練では、義手を装着した状態で筋電位を表示できる装置が無いため、筋電位出力を確認することができませんでした。本研究では、義手装着中の筋電位を表示可能な装置を開発し、訓練時に試用を行いました。筋電位波形を表示することで、訓練時の問題点が視覚的に判別可能となりました。



訓練使用時の様子

脳卒中片麻痺者の三次元歩行シミュレーションに関する研究

主任研究員兼研究第二グループ長 赤澤 康史

歩行には転倒のリスクが伴いますが、患者様の歩容（歩く様子）を観ずに練習プログラムを立案することは困難です。ある人が実現可能な歩容を予測できれば安全にそれが検討可能になると考え、私たちは片麻痺歩行をコンピュータ上で再現する研究を行いました。運動の本質を保持したまま全身の骨格・筋・運動制御をモデル化し、小規模PCクラスタ上で片麻痺の特徴を持つ三次元かつ多数歩の歩行の生成に成功しました。また、装具の「かたさ」が歩容に及ぼす影響を定量的に検討できる可能性を確認しました。



筋骨格モデル

在宅支援福祉用具・福祉機器のニーズに関する調査研究

研究員 原 良昭

福祉用具が活用されるには、その存在が現場に知られている必要があります。そのため、公的機関やメーカーなどは福祉用具を必要とする人に、福祉用具の情報が行き渡るように広報活動を行っています。しかし、福祉用具の情報が現場にどの程度知れ渡っているかは明確ではありませんでした。我々は、福祉用具に関するニーズ情報を分析し、「ニーズ全体に占める、既存の福祉用具で対応できるニーズ情報」を求めることにより、福祉用具の情報がどの程度知れ渡っているかを考察しました。

ニーズ情報（要約）	杖を置こうとすると倒れてしまうのではないか。なお、紐がついている杖もあるが引っかけられる場所もなく、ホームセンターで800円で売っていたバランスを利用して杖を引っかけ品を試したが駄目だった。
回答（要約）	商品や対策：
	転ばぬ杖（ユーワ）、つえつえほー（エムズジャパン）、滑り止めとしてゴムを巻く記載して欲しかった情報：800円で購入した商品名引っかけ先の形状

図1 ニーズ情報の分析例

研究第一グループ

**研究
テーマ** バリアフリーに配慮した生活道路のゾーン対策に関する提案研究

主任研究員兼研究第一グループ長 北川 博巳

みなさんにとって身近な生活道路は、交通安全確保のためにゾーン対策という手法がとられています。歩道のない道路やコミュニティ道路のバリアフリー配慮事項を整理し、福祉のまちづくりの視点を取り入れた生活道路のゾーン対策の特徴を明らかにしていきます。



**研究
テーマ** ICT機器を活用した知的障害児、発達障害児のコミュニケーション支援に関する研究

研究員 大森 清博



特別支援学校や知的障害児施設で iPod touch や iPad を活用したコミュニケーション支援・日常生活支援の実践を通して、ICT 機器を施設に効果的に導入するための方策を整理すると共に、活用促進のための研修などを進めています。

**研究
テーマ** 県民参加型の点検と助言による施設改善に関する研究 等

専門員 難波 健



研究所2年目は、福祉のまちづくり条例に関する研究に取り組みます。障害者、福祉に関わる方々や行政の方々との連携を密にして、福祉が充足する生活や空間のそもそも論にも想いを馳せながら、楽しく研究活動に励んでいきたいと思っております。

**研究
テーマ** 盲ろう者の自立生活支援のためのインターフェイスと支援機器に関する研究

特別研究員 大西 俊介



盲ろう者の方が単身生活を送るために必要とされる支援機器の研究を進めています。ひとつは、自宅のドア等の開閉状態を手元で確認できるシステムの開発。又ひとつは、盲ろう者の方と通訳を介さずに直接対話が可能となる支援機器の開発に取り組んでいます。

**研究
テーマ** 高齢者・障害者の日常生活における認知機能評価に関する研究

特別研究員 中園 正吾



本を読んだり、スポーツをしたりすることなど、わたしたちの日常生活は、感覚・知覚と運動の相互作用によって行われています。このような人間の機能に着目した認知科学の視点で、高齢者・障害者とご家族や支援者の日々の暮らしに役立つ提案を目指します。

**研究
テーマ** 福祉のまちづくりアドバイザー制度を強化するための指針策定

－既存建築物や小規模建築物におけるバリアフリー配慮と工夫－

非常勤研究員 趙 玖姪



本研究では、客觀性のあるアドバイス作業を強化するという観点から、歩行空間を含め、既存建築物や小規模建築物を対象に、整備基準以外のバリアフリー配慮と工夫指針の提案を行います。

**研究
テーマ** 高齢者・障害者の生活支援交通づくり普及に向けた研究

非常勤研究員 天野 圭子



地域居住を継続するために必要な生活環境のうち、移動環境に焦点をあて取り組んでいます。本年度は交通弱者と捉えられる高齢者・障害者の生活行動を中心に生活支援交通について考えていきます。

**研究
テーマ** 多様な人々に対応したオフィス職場環境の設計に関する研究

非常勤研究員 三谷 信之



ユニバーサルデザインの概念を明らかにするとともに、オフィスの多様な人々の中から特に聴覚障害者の職場環境におけるバリアを建築専門の立場から、解決案を模索研究していきます。

研究第二グループ

研究テーマ 三次元歩行シミュレーション技術の研究とその応用 等

主任研究員兼研究第二グループ長 赤澤 康史
(中央病院ロボットリハビリセンター兼務)

前年までに構築した三次元片麻痺歩行シミュレーション技術を改良し発展させることで、片麻痺の方の身体特性に適合する装具力学特性を計算で求めわかりやすく提示する手法を開発します。また、臨床現場のニーズに沿った支援技術の研究にも引き続き取り組みます。

研究テーマ 在宅摂食嚥下リハ支援機器に関する開発研究 等

研究員 原 良昭

食事中、食べ物を飲み込みにくい方は誤嚥性肺炎や窒息が生じる危険性があります。我々は食べ物を飲み込みにくい方を支援するための機器を病院や企業、大学と共同で開発しています。

研究テーマ 無線式身体計測評価システムに関する研究 等

特別研究員 本田雄一郎
(中央病院ロボットリハビリセンター兼務)

臨床現場にて簡易に利用できる身体動作の計測装置を開発し、運動機能訓練を行っている方の四肢動作を視覚的に提示し、動きの変化を可視化する目的があります。この技術を発展させ、ロボットリハビリテーションで活用するロボットの制御に繋げていきたいです。

研究テーマ 転倒・転落リスク評価指標に関する研究

非常勤研究員 李 虎奎

医療施設における入院患者の転倒・転落予防に注意を払っている看護師の業務負担の低減の一環として、入院患者の転倒・転落リスクを数量化し、転倒・転落のリスク管理を行う研究を行っています。

研究テーマ 高齢者・障害者の個別のニーズに対応した福祉用具等の開発

主査(技師) 中村 俊哉

リハセンターの連携の中で実際の相談事例から個別のニーズに対し、福祉用具等の開発・改良を行い導入することで、障害を持つ方々のQOLの向上を図ることを目的としています。

研究テーマ 筋電義手在宅練習支援システムの開発研究

義肢装具士 根本 和彦
(中央病院ロボットリハビリセンター兼務)

筋電電動義手を使用するには、自在に筋電位出力を調節できることが必須です。本研究では、効率の良い自主練習のために、自宅などでも使用可能な筋電位波形の表示装置の開発を行います。

特別研究員 中村 豪

(中央病院ロボットリハビリセンター兼務)

ロボットリハビリテーションの普及にあたり科学的な訓練効果の証明が求められています。本研究では身体の状態を測定し、ロボットリハビリテーション訓練前後での身体動作の変化を数値的に示す研究開発を行っています。



平成25年度 研修事業について

家庭介護・リハビリ研修センター課

当センター課では、障害者や高齢者の地域生活を支える人材の育成と、地域におけるリハビリテーション活動の支援を目標とし、充実した研修に向けて取り組んでいます。

人材の育成では、兵庫県の委託を受け、厚生労働省が定める「認知症介護研修」「サービス管理責任者等研修」「相談支援従事者研修」を、地域のリハビリテーション活動支援として、「介護予防推進・介護啓発者研修」「高次脳機能障害研修」を行っています。また、その他にも今年度は「わかりやすい文書作成に向けた研修」「認知症介護実践研修実践リーダーフォローアップ研修」等を実施する予定です。

日程・内容など詳細についてはホームページにてご案内していますのでご覧ください。

研修予定一覧

	研修名	定員	回数
認知症介護研修	認知症介護実践研修（実践者研修）	各60名	年4回
	認知症介護実践研修（実践リーダー研修）	各30名	年2回
	認知症対応型サービス事業開設者研修	30名	年1回
	認知症対応型サービス事業管理者研修	各30名	年4回
	小規模多機能型サービス等計画作成担当者研修	60名	年1回
障害福祉関連研修	サービス管理責任者研修	計660名	年1回
	介護	(160名)	
	地域生活（身体）	(20名)	
	地域生活（知的・精神）	(160名)	
	就労	(160名)	
	児童発達支援管理責任者研修	(160名)	年1回
	相談支援従事者初任者研修	150名	年1回
	相談支援従事者現任研修	60名	年1回
	高次脳機能障がい研修（基礎編）	40名	年1回
	高次脳機能障がい研修（専門編）	100名	年1回

介護予防推進研修	マネジメント研修「高齢者支援における基礎知識 ～その人らしい生活とは何かを考える」	100名	年1回
	プランニング研修～効果的なプログラムとは～	100名	年1回
	テーマ別研修「運動機能向上」	40名	年1回
	テーマ別研修「栄養・口腔機能」	40名	年1回
	テーマ別研修「うつ予防」	40名	年1回
	テーマ別研修「認知症」	40名	年1回
	支援従事者基礎研修①～リスク管理編～	36名	年1回
	支援従事者基礎研修②～スキンケア編～	36名	年1回
	褥瘡予防の支援研修	36名	年1回
	排泄の支援研修	36名	年1回
	福祉用具の基礎研修	36名	年1回
	リスクマネジメント研修	36名	年1回
	ポジショニング研修	36名	年1回
	生活環境改善研修	36名	年1回
	課題解決研修～事例検討を通して	36名	年1回
介護啓発者研修	介護技術ステップアップ研修 STEP 1 ~介護理念・基礎動作~	各36名	年6回
	介護技術ステップアップ研修 STEP 2 ~動きのケアから生活を変える~	各36名	年4回
	介護技術ステップアップ研修 STEP 3 ~アセスメントからプランニングまで~	各36名	年2回
	ターミナルケア研修<総論編>	100名	年1回
	ターミナルケア研修<実践編>	36名	年1回
	住環境調整研修	36名	年1回
自主研修	「分かりやすい文書作成」に向けた研修	40名	年1回
	認知症介護実践研修実践リーダーフォローアップ研修 「高齢者虐待防止研修」	40名	年1回

福祉用具展示ホール ・ウェルフェアテクノハウス神戸

福祉用具展示ホールでは、見学・研修・体験学習等を通して、多様かつ最新情報の発信、福祉人材の育成及びユニバーサル社会づくりに取り組んでいます。

平成24年度は、見学が8,708件17,134人（内テクノハウス：286件3,441人）、相談・情報提供対応が1,548件2,326人、研修・体験学習で27件774人が訪問し、施設の持つ機能を活用しました。

今年度も、福祉用具や住宅改修等の相談等に対し、開発指導員・セラピスト・建築士等の多職種が関わりニーズに則した対応や福祉人材育成の一翼が担える取り組みを行っていきます。

見て・触れて・試して

●福祉用具展示ホール

福祉用具展示ホールでは、約1,200点の福祉用具の展示を行い、福祉用具の普及に努めています。また、年間約50以上の福祉用具を更新し、最新情報が提供できるよう努め、必要な皆様が適切な福祉用具を選定できるようセラピスト等の専門職員が相談対応しています。さらに、兵庫県下の福祉展示機能を持つ施設と連携し、特別展示及び企画展示等を行っています。



●ウェルフェアテクノハウス神戸

様々なニーズに対応できるように、平成23年7月に改修して以降も新たな設備を設置する対応等しています。特に、在宅で生活する高齢者・障がい者等に実際に試していただく中で、より快適な生活を目指す検討が可能となるようにしています。



●見学・体験学習

ユニバーサル社会を推進する人材の育成の一環として、医療福祉系学生を対象とした「福祉用具展示ホール1日実習体験コース」、小学生を対象とした「体験学習」を申し込みに応じて行っています。

体験学習では、視覚障害者・高齢者・片麻痺の疑似体験や車いす体験を通じて、生活障害の理解を深められるよう取り組んでいます。また、児童民生委員等に当センターの持つ機能を理解して活用していただけるよう福祉用具展示ホール及びウェルフェアテクノハウス神戸の見学も受け入れています。

平成25年度 全国地域リハビリテーション合同研修会 兵庫 開催のご案内

テーマ：「地域包括ケア実現への鍵を探る」

会期 平成25年7月6日(土)、7日(日)

会場 ニチイ学館 神戸ポートアイランドセンター (〒650-0047 兵庫県神戸市中央区港島南町 7-1-5)

プログラム(予定)

7月6日(土)16:00～17:00

イブニングセミナー 「次世代へのメッセージ」

座長：浜村 明徳 小倉リハビリテーション病院 名誉院長

講師：澤村 誠志 社会福祉法人兵庫県社会福祉事業団 顧問

兵庫県立リハビリテーション中央病院 名誉院長

懇親会 7月6日(土)18:00～20:00 ニチイ学館神戸ポートアイランドセンター 1Fレストラン

7月7日(日)10:00～16:30 (9:00 受付開始)

■オープニング演奏(バイオリン：ロンドンパラリンピック水泳日本代表 野村 真波さん)

■特別講演 「地域包括ケア実現へ向けて～二次圏域コーディネーターの重要性～」

座長：柳 尚夫 兵庫県淡路県民局 洲本健康福祉事務所(洲本保健所)所長

講師：逢坂 悟郎 厚生労働省老健局老人保健課 医療・介護連携技術推進官

■全国地域リハビリテーション研究会・全国地域リハビリテーション支援事業連絡協議会 総会

■シンポジウム1 「地域包括ケア実現への鍵を握る二次圏域コーディネーターの活動」

座長：逢坂 悟郎

シンポジスト：廣岡 幸峰 特定医療法人社団順心会 津名病院 理学療法士

平瀬 千恵 兵庫県淡路県民局 洲本健康福祉事務所(洲本保健所)企画課 保健師

兼子 芳文 姫路市地域リハビリテーション支援センター 所長

小幡 彰一 舞鶴赤十字病院 理学療法士

内田 弘子 大分県福祉保健企画課 保健師

■シンポジウム2 「障害者ケアマネジメントで何が変わるのか？変わったのか？」

座長：柳 尚夫

玉木 幸則 社会福祉法人西宮市社会福祉協議会

障害者総合相談支援センターにしのみや センター長

シンポジスト：三戸呂 克美 兵庫頸髄損傷者連絡会 会長

精神障害ピアソーター

中川 裕美子 社会福祉法人愛心福祉会 愛心園 (西播磨圏域コーディネーター)

■研修会参加費

一般当日：4,000円

学生当日：500円

■イブニングセミナー無料

■懇親会(事前登録のみ)

※懇親会は事前登録のみ

3,000円(定員100名)

■大会事務局

〒651-2181 神戸市西区曙町1070

社会福祉法人 兵庫県社会福祉事業団

総合リハビリテーションセンター総務課 田中 石戸

TEL 078-927-2727(代表) FAX 078-928-7590

Email info_rha@hwc.or.jp



平成25年度全国地域リハビリテーション合同研修会

検索

アシステック掲示板

参加
無料

ひょうごユニバーサル社会づくり推進大会・第21回福祉のまちづくりセミナー

とき 平成25年7月31日(水) 13:30~16:30
ところ 兵庫県公館(神戸市中央区下山手通4-4-1)
対象 関心のある方ならどなたでもご参加いただけます
定員 240名
内容 ひょうごユニバーサル社会づくり賞 贈呈式 ほか
記念講演
「生きる勇気をありがとう」 清水 哲 氏
(元P.L.学園高等学校野球部員)



し みず てつ
清水 哲 氏
元P.L.学園高等学校野球部員
清原、桑田選手と共に甲子園出場を果たし、第66回全国高等学校野球選手権大会準優勝など数々の功績を残す。その後も同志社大学に進学し、野球を続けるが、一回生の関西学生リーグ公式戦で二塁ヘッドスライディングを試みた時に、相手のショートと激突。首の骨を折り、頸髄損傷の診断を受ける。

参加
無料

第3回 見ることに不自由さを抱えている方のための ユニバーサル機器&誰にでも役立つ防災グッズ展

とき 平成25年9月8日(日) 10:00~16:00
ところ 福祉のまちづくり研究所 1階エントランスホール
内容 拡大読書機・ルーペ・点字プリンタ・視覚障害者用パソコンソフト・音声情報機器 ほか
主催 眼の会
共催 福祉のまちづくり研究所

参加
無料

福祉のまちづくり研究所 創設20周年シンポジウム 障害者、高齢者の機能・生活改善とロボット技術の融合を目指して(仮称)

とき 平成25年11月9日(土) 10:30~15:30
ところ 兵庫県公館(神戸市中央区下山手通4-4-1)
内容 ミュンヘン工科大学 ルーツ教授による基調講演 ほか
対象 関心のある方ならどなたでもご参加いただけます
定員 300名

※いずれのお問合せも当研究所企画情報課まで



「情報をよりタイムリーに、より
わかりやすく」をモットーに

企画情報課スタッフ紹介

(左から)
次長 楠原 勝則
課長補佐 後田 耕二
事務補助 田中亜由美
課長 水口 信宏

平成24年度報告集発行



ご希望の方は下記まで、
お問い合わせ下さい。

アシステック通信

第69号(平成25年7月)

[編集・発行]

社会福祉法人 兵庫県社会福祉事業団
総合リハビリテーションセンター
兵庫県立福祉のまちづくり研究所

〒651-2181 神戸市西区曙町1070
TEL 078-927-2727(代) FAX 078-925-9284
<http://www.assistech.hwc.or.jp>

編集後記

おかげさまで研究所は今年の10月で
20周年を迎えます。

アシステック通信も研究所設立の直後に
創刊され、歩みを同じくしてまいりました。
この間、研究所の広報紙として研究成果や時々の話題
を特集し、幅広い読者に分かりやすくお伝えすること
を心掛けて編集してまいりました。今後もこの姿勢を変え
ずタイムリーな情報提供を続けてまいりますのでよろしく
お願ひします。

アシステック通信編集委員
後田 耕司